

## 柳江庵撰会所本『狂俳袖濡す』の紹介と翻刻

富田和子\*

### はじめに

役者評判記に見立て、名古屋名物や有名人評判などを記して、文化初年頃の名古屋の世相を描く『名府玉尽し』全（文化五（一八〇八）年 可笑著 未刊本）がある。この巻頭は、井上士朗。「極上上吉 宗匠 士朗」、「風雅俳諧の達人と聞へ」、「当時の達物、親玉親玉」などと評される。蕪村が士朗宛の手紙（安永七（一七七八）年頃）の中で「尾張名古屋ハ士朗（城）で持つ」と持ち上げるほどの実力者なのだから当然であろう。これに、柳江庵鸞亭も載り、鸞亭は、「上上吉 点者 鸞亭」、「俳諧冠句達人当国并三遠美勢の名尊也」、「どなたがなんとおっしゃっても、近年日に増し御はんじやう」、「大評大評」などと評され、士朗にはやや及ばないものの、たいそうな遇されようである。また、鸞亭は、文化六、七年頃岐阜から移住したものと推定されているが、『金鱗九十九之塵』（天保末年以降弘化頃までに成るか）の「◇禰宜町」の項で、「△狂俳撰者 初名鸞亭 後 柳江庵雁砂」と記され、その住人代表の一人目に挙げられる。これらから鸞亭が、文化五年には名古屋でとても有名な俳

諧冠句点者であり、その後、狂俳撰者となっていたことがわかる。そして、文政三（一八二〇）年に、鸞亭の一周忌追福のために、鸞亭の撰句を集めて編まれた『冠句選』（士蔚序、米袋跋）は、半丁に一句掲載で、春溪の画、四十七丁の入る濃淡二色摺りの豪華本である。そして、この跋文を寄せる米袋が、二代目柳江庵を継承し、三代目を麦袋が継承する。つまり、鸞亭は文政二年に亡くなり、「柳江庵」は襲名されるほどの大名跡であったことがわかる。さて、本稿で取り上げる柳江庵撰の会所本『狂俳袖濡す』は、刊記などはないが、表紙に「鸞亭、佛追福」とあり、撰者は「柳江庵」であることから、初代柳江庵が亡くなった文政二年頃刊と推定したい気持ちが起こる。そうなれば、名古屋の「狂俳」の呼称について、従来よりも十年早い使用を確認できることになるからである。というのは、宮田正信氏が『雑俳史の研究』「文化文政期の雑俳」の中で、「当時名古屋では「雑俳」と同義で「狂俳」の称が行はれた」とされた。これを受け、「狂俳」の呼称が使われ始めたのは、化政期頃と推測しつつも、その初見を、文政十二（一八二九）年刊の『奉納榷木社 狂俳冠句壹編』（撰者 味足斎・一儷舎。巻本 泉田之郷（刈谷） 枝雪）としてきたからである。

しかし、化政期の名古屋の雑俳会所本は現存するものが少ないため、『狂俳袖濡す』の掲載句の俳号からみて、初代柳江庵鸞亭とは断定しづらいところがある。もちろん『冠句選』に六句載り、それ以後、見られない谷風や、『冠句選』に一句載り、それ以後、見られない花風・如雀・如雷がいるのは確かである。しかし、現存するものが少ない中、初代柳江庵よりも、天保七（一八三六）年、同十二年に「柳江庵鸞亭」を名乗る点者がいることから、こちらの「柳江庵鸞亭」と見るほうが穏当なのである。

では、十九年後とはいえ、当時、柳江庵を継承する二代米袋、三代米袋がいる中で、なぜ初代と同じ「柳江庵鸞亭」を名乗ることができたのであろうか。疑問が残る。

それに、鸞亭は、先に見たとおり『金鱗九十九之塵』で「△狂俳撰者 初名、鸞亭 後、柳江庵、雁砂」と記される。この「柳江庵雁砂」は、石橋庵真醉撰の『冠句選集』初編（天保八年）の自序に、「爰に集むる狂俳の冠句は樗良先生の風調をまねび、近くは古柳江庵、鴈紗翁の撰に倣ひ<sup>10</sup>」とあることから、天保八年には亡くなっていたと推測できる。とはいえ、『冠句選』では、序に「故人鸞亭先生也」とあるばかりで「雁砂」に触れていない。また、本稿で紹介する『狂俳袖濡す』は、「鸞亭佛追福」である。では、文政二年に亡くなった鸞亭と、天保期に点者をする鸞亭の間にどのようなかわりがあるのであろうか。興味が尽きない。

そこで、本書を翻刻し紹介したい。末尾に図版を付す。

因みに、最近、表紙に「文政八 乙酉蛾月（十二月）」と興行年を明記した清書卷『狂俳満願の暁』（石橋庵評 瀬戸三社奉納左右巻）（名古屋 野田實家文書の内）をみることでできた。年代の明確なものではこちらが初見となる。この点者の石橋庵は、『尾張狂俳

の研究<sup>12</sup>』で紹介した石橋庵真醉のことで、前掲の『狂俳選集』初編の撰者である。尾崎久彌氏は彼を「椒芽田楽（醫、神谷剛甫）と相並んで、名古屋文壇の牛耳を執つたものである」と評された人物である。そして、瀬戸三社は、三社大明神社（現在の愛知県瀬戸市中水野町一五七九）のことであろう。この『狂俳満願の暁』の出現によって、文政期には三河だけでなく尾張でも興行が行われていたことが実証された。また、当時五十二歳（数え年）の真醉は、前年正月から「江戸柳樽風の誹諧」をはじめている。<sup>13</sup>『狂俳満願の暁』の出現は、狂俳と江戸柳樽風の誹諧（川柳）の興行の違いについて検討できそうである。しかし、興行年と興行場所は明確ながら、保存状態が悪く、ほとんど内容を確認することができないのは、とても残念なことである。

次に、簡単に書誌を記す。

○『狂俳袖濡す』

刊記はないが、表紙に「鸞亭佛追福」とあることから、文政二年頃と推定したい会所本。撰者、柳江庵。巻本、遊糸。鸞亭は初代柳江庵、撰者は『冠句選』で跋文を寄せる二代目柳江庵米袋であろうか。しかし、鸞亭は天保期に点者をする柳江庵鸞亭ではないと断定できない。小本（二五・〇×一〇・一糎）。墨付き六丁（表紙共）。共表紙（裏表紙欠）。百番句まで掲出。架蔵。題は折句七題、狂俳五十一題で、それぞれを列記すれば、次のとおり。

折句 七題。

キフツ・アハセ・トコニ・ナツメ・ハハキ・フクサ・ヤクミ

狂俳 五十一題。

折く・おけといふに・きのふけふ・くらひべ・時雨の跡・にく

まれ子・むつかしう・案事く・花の里・七草・秋の夜・正月・短  
か夜・乳もらひ・風に吹れ・目出たがり・留守番・力に任せ・簀子  
縁・成合に・お姫様を女房にして・の鉄砲・はさかひ帯・むしこか  
ら・もや／＼・やれうれし・何遍も・金持ちになる妙薬・犬の声・  
戸棚・子を抱て・手を組で・宿とりて・小気味能・小半日・情出し  
て・水くさう・窓の月・天窓剃・田にしとりの娘・杜若・奴・年  
男・梅の小家・萩の山・平気さん・目をほちく・門口・柳腰・姫入  
ざかり・枯声。

○凡例

翻刻にあたり、読解の便をはかつて、次のように扱った。

- 1、濁点、句読点を施した。ただし、底本にあるものと、恣意に施したものとを区別していない。
- 2、異体字を含めて漢字は原則として通行字体に改めた。ただし、例外もある。
- 3、慣用・誤用の漢字や仮名遣いは、誤解のないと思われるところはそのまま残した。
- 4、(一)内の文字及びルビは、恣意に施したものである。
- 5、※以下に、簡単な語釈を記した。
- 6、底本は、架蔵本を使用した。

○『狂俳袖濡す』

鸞亭佛追福

狂俳袖濡す

撰者 柳江菴(庵)

巻本

遊糸

花に出る日を紙衣ぬぐ

表紙

巴水

案事く

※案事Ⅱ気にかかっていること。心配事。※花に出るⅡ目立つところに出る。〔参〕敵持ち月は見れども花に出ず、〔柳多留・六〕※紙衣Ⅱ和紙を貼り合わせて作った粗末な着物。

折く

聲呼らぬ返事する

遊糸

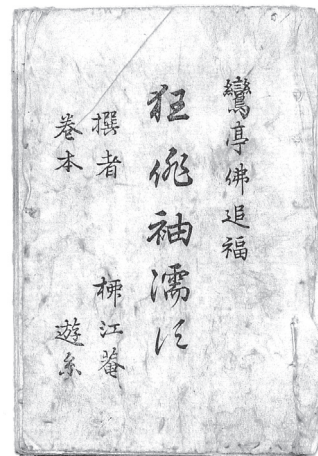
花の里

貫はず躍る非人居

其洞

※花の里Ⅱ花の咲く里。又は、遊女を花に見立てて遊里のこと。

※非人Ⅱ江戸時代、穢多とともに土農工商の下におかれた被差別階層の人。生産的労働に従事することは許されず、遊芸や物貰いなどで生活し、刑場の雑役などに従事した。〔参〕吉原でひにんのそふをは



たす也（柳多留・三一）

子を抱て

女房には、き解せたり

亀眼

※ははき<sup>はき</sup>簪。※解せたり<sup>はき</sup>簪の先の乱れを整えさせた。

簀子縁

居り<sup>すわ</sup>覚へて梅を見る

雅楽

※簀子縁<sup>すのこ縁</sup>簀子（角材）を並べて造った建物の外側の濡縁<sup>ぬれえん</sup>。寢殿造り<sup>ひろびし</sup>で、広庇の外に造った板縁。簀の子で造ったのでいう。

水くさう

達者自慢が先へ行

香枝

※水くさう<sup>すい</sup>水くさい。よそよそしい態度である。

柳腰

桃色ほどに酔てをる

鳥仙

お姫さまを女房にして 白味噌汁にしられたり

※白味噌<sup>しろ</sup>味噌<sup>みそ</sup>のうちでも上等とされ、高級、美味などのたとえにも用いる。主に京都で作られる西京味噌などがある。

正月

隣から百かりに來た

其洞

十  
「蜻蛉の小戻りしたり<sup>（にわなずめ）</sup> 潦<sup>（らう）</sup>」

阿巴里

※潦<sup>（らう）</sup>雨が降ったりして、地上にたまつた水。水たまり。 一才

七草

はやしながらに舟が行

呉朗

目出たがり

聞えぬ耳へ年をきく

如雀

平氣さん

毎日負ける角力が行

一宗

もや／＼

千手蚊の口搔給ふ

遊糸

※千手<sup>せん</sup>千手<sup>せん</sup>観音（千手千眼観自在菩薩）のこと。衆生をあまねく濟度する大願を千本の手に表す観音で、千は無量圓滿を表す。ふつ

う四十二の手を持つ像につくる。特に虫の毒・難産などに秀でており、夫婦和合の願いをも満たすという。※蚊の口<sup>（くちばし）</sup>蚊や蚋などに食われた跡。

秋の夜

拍子が付て宵寝する

蕪山

※拍子が付て<sup>（は）</sup>何かのはずみで。

力に任せ

くどく酔人を突こかす

香枝

※突こかす<sup>（つ）</sup>突き倒す。

むつかしう

坐頭<sup>（ざ）</sup>八糸に懸つたり

紫麦

小気味能

柳の土手で脱かへる

其白

※柳の土手<sup>（ど）</sup>『江戸名所図会』へ一・柳原堤に描かれ、古着屋の並ぶ地として有名な柳原土手のこと。※脱かへる<sup>（だ）</sup>着替える。

何遍も

草履探す燈を消らかす

ツシマ 玉之

二十

※背戸<sup>（せ）</sup>家の後ろにある庭や広場で、人目につかない場所。一ウ

花の里

人にほえ付犬がをる

龍船

金持になる妙葉

なめて見りやちと小暖とい

花仙

宿とりて

宿に一夜も寝なんだり

如雷

何遍も

男にしたい八卦見る

谷風

杜若

鳥影さしてほどけたり

巴水

むしこから

法<sup>（は）</sup>（報）謝した手が抜けぬ也

龜卜

※むしこ<sup>（む）</sup>むしかご（虫籠）。※報謝<sup>（はう）</sup>物を贈るなどして報いること。

成合に

脱捨曲て借に行

花風

※成合<sup>（なりあ）</sup>成り行きに任せること。

くらひゞ

胸ぐらとつた女房拌む

湖石

※くらひゞ<sup>（くら）</sup>生活に困ること。また、その者。

情出して

飯もるうちに煮豆くふ

柴町

畑主<sup>（は）</sup>に花の名とへバ生<sup>（は）</sup>（胡）瓜かな

不及

三十

二才

花の里	真ひる曇りに鳩が鳴く	巴水
むつかしう	煤掃天窓抱(包) んだり	雅楽
目出たがり	草臥足を寝さしやせぬ	如雀
※草臥足Ⅱ歩き疲れてくたびれた足。疲れた足。		
おけといふに	廊の旁(傍)へ曲るなり	柳枝
※おけといふにⅡ「止めておけと言ふのに」の意。		
しぐれの跡	猫が茶釜の蓋落す	呉朗
※猫は茶釜の蓋で狩人が撃つ弾をよけながらその数を数えているが、最後、狩人が別に持っていた御守りの命(いのちたま)弾で撃たれるという		
「猫と茶釜」『日本昔話大成』七卷二〇頁(二五三A)。愛知県・岐阜県にも分布する昔話	の化け物語が想起される。	
簀子縁	いひ分(わけ)したいおとがする	其白
正月	くふ手を出すもどかしい	野人
折く	日懸の筒でかりる也	不及
※日懸(掛)けⅡ毎日一定の額の金銭を積み立てること。また、その掛け金。		
やれうれし	酔人にはぐれあふせたり	香枝
戸を明る <sup>(こたま)</sup> 罌 <sup>(に)</sup> を遣るや鳩の秋		里瓶
四十		二ウ
杜若	合鏡の目がよどむ	山月
子を抱て	鉢の子へ銭入れさせる	花菜
※鉢の子Ⅱ僧尼が托鉢の時に所持する器。		
戸棚	車の上に鳴つて行	巴水
年男	笑ひ終つて始めたり	雨晴
枯芦	鯨いとなむ人がよる	巴水
もやく	帛紗がさばけかねる也	湖石

乳もらひ	中々狎がよせ付けぬ	遊糸
情出して	おシヨケの客が齒をほざる	亀卜
※シヨケ(所化)Ⅱ寺の会計や雑務を扱う下級の僧。納所坊主。		
※ほざるⅡ穿る。隙間にはさまったものをつつき出す。		
天窓刺	夫(それ)からも子が二人出来	呉朗
※天窓刺Ⅱ坊主頭になる。ここは、頭を刺つて僧になること。		
五十		
如月や伏見街道の土細工		不及
※伏見街道Ⅱ京都市東部を南北に走る道路の呼び名。五条通りから南下し伏見に通じる。沿道に東福寺・伏見稲荷大社がある。全長約六キロ。※土細工Ⅱ土を焼いてつくった細工物。ここは伏見人形(京都伏見で製する土製の雛人形。安土桃山時代頃から作られ、形や彩色の素朴なもの)のこと。		三才
梅の小家	明捨にしてお留主なり	井堀野人
※明捨(開け捨て)Ⅱ戸などをあけつ放しにする。		
子を抱て	うまさうに顔なめてをる	如雀
金持ちになる妙薬	嚏(くしゃみ)に散て仕舞たり	烏仙
※嚏(くしゃみ)Ⅱくしゃみ。		
力に任せ	題目の珠数すりすえる	呉朗
※珠数Ⅱ数珠のこと。「珠数」とも書いた。		
はさかひ帯	花の小舟を漕て行	椰朗
情出して	抱(かか)り澄す気でみがく	亀卜
くらひメ	ひやひな処で涼しがる	里瓶
犬の声	取揚婆々へはしる也	紫雀
門口	尻から逃て手をせきる	如雀
※せきるⅡ塞き入る。せきとめること。		

「屋根草にくれ行春の見ゆるかな  
六十

時雨の跡

何遍も

力に任せ

※くさうらしい。

やれうれし

萩の山

の鉄砲

※の鉄砲Ⅱでたらめ。ほら。

むつかしう

門口

※剃毛Ⅱ剃り落とした毛。髭剃り後の残り水なのだろうか。貴重な

水が無駄にしないで門口の打ち水に使う様子。

やれうれし

「朝影や鳩のなぐさむ蟬の殻  
七十

しぐれの跡

奴

小半日

※画絹（えぎぬ・がけん）Ⅱ絵絹の一種。日本画をかく時用いる画

布。とても細かい繊維の半透明性のシルクで織られたもの。

にくまれ子

※手妻Ⅱ手品。奇術。

窓の月

きのふけふ

虫歯かゝへて起てをる

手水柄杓がとれぬ也

巴水

三ウ

東月

山月

東月

鳥仙

巴水

馬穴

不及

生笑

竹馬

亀ト

四オ

呉朗

花風

香枝

湖石

遊糸

玉之

遊糸

遊糸

遊糸

遊糸

遊糸

遊糸

遊糸

遊糸

六六

時雨のあと

田にしとりの娘

情出して

七草や摘もはやすも女夫同士

※女夫Ⅱ夫婦。妻と夫。

風に吹れ

小半日

※一石Ⅱ一つの石。ここは、碁打ちを楽しむ様子。

目をほちく

※ほちくⅡ穿く。

手を組で

※遠見Ⅱ遠くを見ること。高い所にのぼって遠方を見張ること。

小気味能

おけといふに

※土くひⅡ土食い。亜鉛や鉄分の不足で、妊婦が土壁をかじった

り、地面の土を食べることがあった。

何遍も

やれうれし

姫入ざかり

※おいどⅡ御居処。「おしり」をいう女性語。

藤咲くや鞍工合よき在所馬

※在所Ⅱ近隣の田舎。

折く

きのふけふ

きのふけふ

きのふけふ

きのふけふ

山伏を見て鴉啼く

野遊びに目を付てをる

質屋へ通ふ着物也

遊糸

蕪山

四ウ

蝶夫なりに分れたり

一石打た手が退かぬ

おしろいの顔仕あげする

くつ脱すえて遠見なり

霧隠れした不二が出る

又土くひに飛び出たり

とふしたゆびか嗅で見る

案山子ときめて通りこす

苦にするおいど大きな

アツタ

山月

全

其舩

木鱗

五オ

花の吹雪の袖払ふ

恋を忘れた猫が来る

都岳

柳枝



留主番

膝皿包む片手出す

竹馬

※膝皿＝膝がしらにある皿のような形の骨。

乳もらひ

元の眉毛に成てをる

金蝶

短か夜

ひとり寝にさへ足らぬ也

井堀野人

家事く

配ざいをして猪口を盛

田俤

※配ざい (配剤) ①薬の調合。②とり合せ。

くらひメ

塩茶の下女に刎られる

遊糸

※塩茶＝塩を少し加えていた番茶。悪酔いに飲ませる。※刎られる＝拒否される。

にくまれ子

いつち躍の手がかるい

香枝

※いっち＝一番。

やれうれし

仏間払へバ盆が来る

いろを

秋風やはれくしくも関の松

巴水

※関の松＝勧進帳で有名な安宅の関の松のことか。

五ウ

## 注

- (1) 『名古屋叢書』第十六卷「風俗芸能編」(1) (愛知県郷土資料刊行会 一九八二年) 所収。
- (2) 名古屋市博物館蔵。「中日新聞」二〇〇七年一月七日朝刊掲載。
- (3) 鈴木勝忠編『天保名古屋狂俳集』(『雑俳集成』第一期 十二 東洋書院 一九八五年) 五頁。
- (4) 『名古屋叢書』第六卷「地理編」(1) (愛知県郷土資料刊行会 一九八二年再版) 解説二頁。
- (5) 『名古屋叢書』第八卷「地理編」(3) (愛知県郷土資料刊行会 一九八三年再版) 三九五頁。

(6) 既出『天保名古屋狂俳集』四五頁。

(7) 『名古屋市史 学藝編』(名古屋役所 一九一五年) 一七五頁。

(8) 宮田正信『雑俳史の研究』(赤尾照文堂 一九七二年) 三四九頁。

(9) 既出『天保名古屋狂俳集』五四頁。

(10) 鈴木勝忠編『未刊雑俳資料』三五期十三『狂俳選集』(一九六六年)。

(11) 野田實家文書については、『愛知県史』資料編十五「近世一名古屋・熱田」九六六頁に掲載がある。

(12) 「石橋庵真酔の文芸活動」(富田和子『尾張狂俳の研究』勉誠出版 二〇〇八年) 二八三頁。

(13) 尾崎久彌「郷土本概説」(『近世庶民文学論考』中央公論社 一九五〇年) 一六頁。

(14) 「猿猴庵日記」文政七年正月廿三日(『日本都市生活史料集成』四 学習研究社 一九七六年) 六二七頁。

\* 生活科学部 生活環境デザイン学科

【付】図版 柳江庵撰会所本『狂俳袖濡す』 ※表紙は六三頁に掲出

花のふり目銭紙衣ぬく  
 聲々々ぬるする  
 実の躍る人 居  
 如房又々々解せり  
 居るえり 柳残る  
 蓮名自性うとく 柳  
 桃竜やとと碎てる  
 白味雪けととととと  
 晴々百々又とと  
 十世 吟の小 灰々々り 漆

巴水 遊系 其洞 龜眼 雅樂 香菱 高仙 企 其洞 阿巴里

七子  
目如かり  
年熟きん  
りや  
秋の萩  
力ふほせ  
むつり  
小氣味能  
何遍を  
花より葉も  
ちやうくくくく又舟りり  
ぞえぬ舟へ年茂きく  
毎日願ける南カウ  
ふ手取の口橋  
梅子うけて背掻す  
くく餅入残笑こうす  
空歌凡中系は懸つくり  
柳の云まで促くくく  
芝履探け懐と消くくく  
花より葉も  
呉明  
如雀  
一宗  
遊糸  
蕪山  
香美  
柴麥  
其白  
王之  
山月

花の星  
 金はまゝ  
 何遍も  
 杜ふ  
 おこ  
 成合  
 うち  
 出で  
 因  
 人  
 宿  
 男  
 高  
 法  
 脱  
 狗  
 版  
 花  
 龍  
 花  
 如  
 谷  
 已  
 龜  
 花  
 湖  
 柴  
 不



花の里  
おつう  
目あがり  
おき  
あふまゝ衣  
簪子様  
正月  
おく  
やまはるほ  
戸を解る  
早

去るる思ふもたづなり  
様掃天宮地へりり  
そ外長代麻子やせぬ  
廓の物なるなり  
猶う釜金の蓋落す  
ひびきしむねとす  
うふみ出たるもとりん  
日無の箇々かざるや  
酔人よこしめりせり  
翁をきくや鳴の秋

井垣

巴水  
雅樂  
如雀  
柳枝  
吳朗  
其白  
野人  
不及  
香爰  
里瓶

杜若 合鏡の因々よりとむ  
 三枝花 珠のふへ珍金とさせる  
 戸棚 車の上より鳴つゝ水  
 牽男 芳ひ結つゝ始免しり  
 枯花 絲々とあむ人より  
 りや 吊砂りささけう結るや  
 亂るゝ 中々伸うよせけりぬ  
 腰刀で ねとよけれあう齒をささる  
 了了刺 夫うゝを子二人出れ来  
 月や 伏見御堂の古細工  
 山月 花樂  
 巴水 雨晴  
 巴水 湖石  
 遊糸 龜卜  
 具朗 不及

柿の虫か  
 子銭抱て  
 今指<sup>あふ</sup>  
 力おほせ  
 いさ<sup>あふ</sup>  
 晴出<sup>あふ</sup>  
 うひひ  
 大のま  
 門口  
 屋根<sup>あふ</sup>  
 平

明鏡<sup>あふ</sup>  
 う酒さうふ新あめてなる  
 嚏ふあふは舞<sup>あふ</sup>  
 歌目の珠数<sup>あふ</sup>  
 花の心丹<sup>あふ</sup>  
 瘡癩<sup>あふ</sup>  
 ちやひあ<sup>あふ</sup>  
 老楊<sup>あふ</sup>  
 尻<sup>あふ</sup>  
 平

野人  
 如雀  
 馬仙  
 吳朗  
 椰明  
 龜卜  
 里瓶  
 梁雀  
 如雀  
 巴水

時勢の依  
 何處も  
 カは怪  
 やま  
 萩の山  
 の終地  
 びつり  
 門口  
 やま  
 朝顔や  
 鳴のうぐさむ標の売

東月  
 山月  
 東月  
 馬仙  
 巴水  
 馬穴  
 不及  
 生笑  
 竹馬  
 龜ト

小半日  
 虫  
 玉の月  
 山依を  
 中  
 賢  
 摘  
 風  
 小半日  
 目  
 石  
 一  
 打  
 石  
 又  
 山  
 葉  
 龜  
 古  
 香  
 椰  
 山  
 其  
 木

秋風や  
 花の吹雪の袖拂ふ  
 庭残花よりこぼれ来る  
 緋血乞む月も出ず  
 元の眉毛は成るを  
 却より病嬌うまふぬ  
 配ふをて情は微盛  
 塩菜の下は剣らむ  
 心は躍のまゝ初るに  
 佛召拂へハ金々  
 ともてあつたの秋  
 都兵  
 柳枝  
 竹馬  
 金蝶  
 野人  
 田代  
 遊糸  
 雪夷  
 巴水